

## 応用倫理学に関わる理由

品川 哲彦（関西大学）

大上段にふりかぶる稚拙なやり方だけれども、哲学とは何かという問いから話を始めたい。私は、哲学とは自明に思われていることがらを根底からあらためて問いなおす営みだとうけとめている。そして、倫理学（道徳哲学）とは倫理（道徳。ここでは両者を同義に用いる）を対象とする哲学的思索、つまり倫理の根底を問いなおす営みだと考えている。

倫理は人びとに共有され、生活を維持し、規整するものである。だとすれば、倫理を無前提に問いなおすのは適切かとも問われよう。たとえば、「なぜ、人を殺してはいけないのか」といった問いを純粹に知的な関心から発しているのか。倫理学が倫理のもとにみずから問いを規制するなら、倫理学は論理的な吟味を経て洗練された(特定の内容の)倫理体系に近づいていくだろうし、逆に、倫理学が徹底して問いつめる姿勢を強調するなら、倫理学は倫理に対してそれを反省する次元を保持することになるだろう。ここではこの問題に深入りしないが、私は、どちらかといえば、後者の方向に共鳴している。

倫理は人びとに共有されるものだといった。それでは、共有者の支持だけで、その倫理は正当化されるのか。おそらくそうではなくて、倫理が独善に陥らないためには、その倫理によって尊重される集団の外部にむけてもなんらかのしかたで申し開きしうるものでなくてはならない。倫理を根底から問いなおすということは、そのように、〈他〉なるものと接触しつつ考えることだと思う。

さて、私が応用倫理学に携わるようになったのはなかば偶然によるが、なおそれを続けている理由は、上記の意味での倫理学の問いは応用倫理学のなかにもあるからにほかならない。たとえば、生命倫理学において、生命の神聖さに関する問いは価値の根底に関わる問いだし、何をもって人格と認めるかという問いは倫理の成り立つ基盤である尊重されるべき存在に関わる問いである。環

境倫理学における人間中心主義と非人間中心主義の対立は、倫理の外部についてどこまで、どのように考えるかという問いでもある。

応用倫理学は浅いという声を聞く。当該の倫理の根底に突き進み、全体を覆しかねぬほどに緊張した問いでなければ、応用倫理学ならずとも、「浅く」なるだろう。とはいえ、具体的な問題に実行可能な回答を出すには、前提された倫理内部の調整、まさに家 (oikos) 内部の法 (nomos) に則したという意味で「経済」的解決になりがちなのは否めない。

応用倫理学こそが根底的な問いたりうると主張するつもりはない。ただし、応用倫理学が登場した歴史的経緯には留意しておくべきだろう。すなわち、二〇世紀前半のメタ倫理学への傾倒に対する反動として、医療問題、環境問題そのほか、人びとが実生活のなかでぶつかる倫理的な問題が注目されるようになったという背景である。だとすれば、道徳哲学 (倫理学) の「現場」はどこかという問いは、人びとは誰か、人間の生活のどのような場面で倫理を考えるのか、という問いにほかならない。そしてまた同時に、日本では、上記の歴史的経緯は共有されているのか、ということも顧慮しなくてはなるまい。

## 真理と生き方の技法の探求

高橋 久一郎 (千葉大学)

かなり面映いタイトルをつけましたが、私の「哲学の現場」について少し話し、議論の素材としたいと考えます。

現在、私が行っている仕事は、おおよそ以下の5つです。つまり、

- 1 アリストテレス研究
- 2 倫理学の哲学の研究
- 3 情報倫理学の研究
- 4 大学における哲学・倫理学教育の検討
- 5 千葉大学における教育管理業務

ちょっとだけ説明しましょう。1は、私の出発点であり、「オーヨーづいて  
いる古典学者」である高橋はアリストテレスを捨てたと噂されましたが、そんな  
ことはなくてならずと毎年一本ほど論文を書いています。もっとも一昨年の  
「哲学会」発表で宇宙論的目的論の可能性を考えると宣言したことから今度は  
高橋はほら話を始めようとしていると言われているようですが。（歴史的研究  
とその現代的意義）

2は、倫理学ではなく倫理学の哲学です。自然主義的倫理学の可能性を考  
えるということで、ここ3年ほどは講義や演習はこれが中心です。まだまとま  
った形にはなっていませんが、14年度で一区切りつけるつもりです。（倫理  
学の哲学の意義）

3は、「応用倫理学＝倫理学」がらみの14年度が最終年度となる学術振興  
会『情報倫理の構築』プロジェクトのメンバーとしての仕事です。もっとも倫  
理的なことをしているかというところでもなくて、情報が倫理を考えるうえ  
でどのような意味を持つかといった部分を分担しています。「倫理学は応用倫  
理学だと言いつつ自分は「基礎論＝倫理学の哲学」ばかりやっている」と学  
生には言われています。（倫理学と倫理学の哲学の関係）

ここまでがまあ「学術」的な仕事で、4と5は生臭く志の低いとなります。

「日本哲学会」「日本倫理学会」合同ワーキングメンバーとして4に関して  
は、14年度の日本哲学会でセッションが開催され、そこで報告します。（現  
代における哲学と哲学教育の意義）

5については、13年度は文学部教務委員長として学部カリキュラムの改  
定と、「哲学教官集団」のメンバーとしてコア科目「哲学と倫理」を全学の必  
修授業とすることを試みました（残念ながらこちらは8割に終わりました）。

14年度はコア科目の実質化の作業をすることになっています。（哲学の「生  
き残り策」）

これらの仕事が私の中で統合されているのか？ 統合されていないとすれ  
ば私は何をしているのか？ 統合されているとすればどのような仕方・枠組み  
においてであるのか？ さらに、そうした統合・その枠組みはまともであるの  
か？ あるいは、まともでないとすれば、まともな統合のあり方はあるのか？  
といったことについて話したいと考えています。

## 生命倫理はいかにして哲学の問題となるのか

森岡 正博 (大阪府立大学)

企画者から、昨今の生命倫理や応用倫理についての議論は、哲学としてのおもしろさに欠けるのではないかという問いかけを受けた。なるほど、そう言われてみると、それはよくわかる。なぜかと言えば、私が大学院生のときに米国からバイオエシックスが翻訳され導入されたのだが、その輸入作業に携わった私が当時痛切に感じたことこそが、その問いであったからである。ごく最近までのバイオエシックスは、米国の社会（自由主義、資本主義）を基本的に前提としたうえで、人格論、功利主義、義務論などをいかにスマートに適用するかという技の見せ合いみたいなのところがあった。そこにあるのは、やはり「応用」であり、その応用を支えているところの根源を問おうとする哲学の営みは乏しいと言わざるを得ない。

しかしこれは、生命倫理の諸問題が哲学とは無関係だということをまったく意味しない。それはそもそもわれわれの生と死、人間観、技術問題を直撃しているわけだから、いかなる意味においても哲学の問いそのものであるはずなのだ。だから、要するに、アプローチの仕方の問題というのが伏在しているのである。私は、1998年から、バイオエシックスに代わって、「生命学」というアプローチを提唱してきた。最近、ようやくその方法論が見えてきたが、生命学はきわめて「哲学的」である。そのあたりのことを中心に、いま考えている課題などについて述べてみたい。なお、日本の哲学界（とくに日本哲学会）の不毛については、論文を発表しているので、私のHPに転載されている論文「現代において哲学するとはどのようなことなのか」(<http://www.lifestudies.org/jp/tetsugaku01.htm>)をあらかじめ読んでいただければさいわいである。この論文で述べたことは、若手哲学研究者フォーラムの諸君にも当然当てはまるかもしれないことである。そのうえで、真の哲学の営

みとは何なのかをめぐって討論したい。なお、私の生命学の最新の成果が、『生命学に何ができるか』（勁草書房 2001年）として刊行されたので、興味ある方は書店や図書館等で参照してみてほしい。